



写真2 大阪府・大庭寺TG232号窯出土の
船形須恵器
(掲載許可：大阪府文化財センター)



写真1 室宮山古墳出土の
船形陶質土器
(波除板部分)

ふるさと御所 文化財探訪

其の二十七

古墳時代(15)
葛城氏の盛衰
室宮山古墳の
被葬者像

生涯学習課 文化財係
☎内線696

ここまで3回に分けて記してきたように、室宮山古墳は墳長23.8mという破格の規模を誇る5世紀前葉築造の前方後円墳で、後円部には「王の棺」といわれる豪壮な長持形石棺を竪穴式石室に納めています。前方部北張出部の被葬者は、王たる後円部の被葬者に忠誠をもって仕えた親衛隊の長であり、また、陪塚ネコ塚古墳には王の下に結成された軍団の武器などを管理する、原初的官僚とも呼ぶべき人物が葬られました。

古墳としての巨大さのみならず、警衛機構としての親衛隊や管理機構としての原初的官僚までもを統治システムとして機能させる様は、まさに大王に比肩する勢力を有した「王」がこの古墳に葬られたことを示すに他なりません。その被葬者の有力な候補として、考古学者の白石太一郎さんと文献史学者の塚口義信さんは、共に葛城襲津彦なる人物を挙げています。

中国吉林省集安に高句麗の好太王(広開土王)の業績を讃えた高さ約6.3m・幅約1.5mの角柱状の石碑があり、その四面に総計1802文字が刻まれています。西暦391年から404年にかけて、倭が度々朝鮮半島に攻め込んだことなどが記されているのですが、日本書紀や古事記にも同様の記事がみえ、その倭軍の中心人物こそが葛城襲津彦なのです。

トピックス

室宮山古墳の三角縁神獣鏡片と碧玉製品
(後円部南石室出土)



三角縁神獣鏡は古いタイプで、室宮山古墳の築造期のものではない。このことは、被葬者の出自が前期古墳の営まれた勢力にあり、当時の三角縁神獣鏡が伝世されたことを示す。したがって7月号で原・葛城氏の墓域と評価した馬見古墳群こそが、室宮山古墳被葬者の出身母体と考えられる。
(掲載許可：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

室宮山古墳の築造年代は5世紀前葉ですから、時期の上でも想定される襲津彦の没年の幅の内に合致しますし、また、記紀(註1)に伝える襲津彦の多くの事績にも相応しい規模と内容の古墳として室宮山古墳を比定するのは妥当と言えるでしょう。

ところで、平成10年の台風7号被害で、室宮山古墳の墳頂部で起こされた木の根の土の中から出土した遺物に船形陶質土器(写真1)があります。日本列島内で作られた還元炎焼成(註2)による灰色の土器は須恵器と呼ばれますが、朝鮮半島などで作られた場合には陶質土器と呼ばれる。室宮山古墳出土の船形陶質土器は外洋船の波除板部分の小さな破片にすぎませんが、須恵器の船形土器(写真2)と比べてみると非常に精緻な文様が刻まれていることが分かります。

まさにこの船形陶質土器は、たび

たび朝鮮半島に渡ったという襲津彦の事績を彷彿とさせるものといえるでしょう。

【参考文獻】
御所市教育委員会『台風7号被害による室宮山古墳出土遺物』、1999年
(文責 藤田和尊)



2010.

11